

ほっとクリニック

町立金山診療所だより 86

金山町大字金山548-2 ☎52-2915



町立診療所は、夜間休日でも急患診察を受け付けています。具合が悪い場合はいつでもご連絡ください。

ドクター・メッセージ

最期のすべり方について考えるみなさんへ

町立金山診療所 内科医長 高橋 利幸

町立診療所では、患者様が自宅で看護を受けたり最期を迎える「在宅看護・看取り」をどうサポートするかについて、本格的に議論をスタートさせました。



看取りの場は大きく変わってきました。厚生労働省の統計によれば、戦後間もなくの昭和26年は約80%の方が自宅で亡くなっていました。病院や診療所で亡くなる方は僅か12%に過ぎませんでした。その後、自宅で亡くなる方が減り、病院で亡くなる方が増え、昭和51年で半々になり、その後もその傾向が続き、現在は病院や診療所だけでなく、老人ホームを含み自宅で亡くなる方は10%へと減少しています。割合からすると丁度逆転したことになります。

亡くなる時はなかなかピンピンコロリという亡くなり方をすることは少なく、大抵の方はゆっくりと最期にむかわれます。人によって最期までの長さはさまざまです。在宅看取りをサポートするということは、それまでの間のご本人の身体的、精神的な苦しみを軽くすることだけでなく、ご家族も含めたサポートを提供するということとなります。

看取りに関する知識の提供、看護師の訪問、医師の診察、場合によっては点滴も可能ですし、介護・福祉のサポートをお願いすることもあります。

今までは病院で看取りするというのが当たり前でしたが、今後は選択肢として自宅、病院、施設などその人自身のご希望に沿った場所を選択することができますようになっています。



ちょっと抵抗があるかもしれませんが、ご自身が亡くなる時を想像してみてください。場所は病室でしょうか？ご自宅の自分の部屋でしょうか？それとも居間ででしょうか？周りには誰がいるでしょうか？あなたにはどれくらい意識が残っているでしょうか？点滴はついていますか？人工呼吸器はつきますか？どのような看取りをされたいかで、今とるべき行動も変わってきます。死生観と呼ばれる考え方で、最期を考えることで今をよりよく生きることができるようにはないかという考え方です。近年の医学、医療の進歩から命は限りなく救えるもののように思われてきました。しかし、けっしてそうではありません。亡くなる覚悟、見送る心構えが必要ですが、同時に、亡くなり方、看取り方も考え、相談すること、そしてご家族で考え方を共有することが必要と感じています。今日、ご家族で話し合ってみませんか。